

シニア世代が最前線で活躍するために

英国発のグラウンドワーク（環境改善活動）を日本に初めて導入し、市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによる地域再生に取り組んできた特定非営利活動法人グラウンドワーク三島。愛称「ジャンボさん」で知られる事務局長の渡辺豊博さんに、シニア世代の環境保全活動についてお話を伺いました。

シニア世代を地域社会を支える主力に

まず、シニア世代について言わせていただきますと、「シニア世代＝年金や医療費をもらっている社会のマイナスイメージ」として語られる場面が多いのですが、それは違うし失礼だと思います。なぜなら、地域が崩壊しようとしている今こそ、シニア世代を地域社会を支える主力に押し上げるべきだと考えるからです。そのためには、シニア世代が自立し自活できる仕組みが必要です。現在、グラウンドワーク三島では環境コ



1階は地元の低農薬野菜等を販売し、2階では飲食のできる「街中カフェ」

ミュニティビジネスとして「街中カフェ」を3店運営していますが、1日の売上は10〜12万円、何人ものシニア世代を雇用しています。地域で生産したものを地域の人が売り、消費する。それ自体は小さな経済かもしれないが、こういった循環が地域を支え、最終的に若者が地域で生きていける体制づくりにつながります。自然環境も同じで、自然と共生する知恵を持ったシニア世代が地域に残り、それを伝えていけば、棚田や里山を守ることができるでしょう。つまり、シニア世代が活躍できる場をつくるのが、地域再生の要となるのです。このことを、最初に言っておきたいですね。

これからボランティアを始めるシニア世代へのアドバイス

「もっと学びたい」「もう一度、社会の役に立ちたい」。そう思っている真面目なシニアが山のようにいます。そうした方々への私からのアドバイスは2つ。1つは、「オレはボランティアをやるん

自慢されると、その瞬間に会話が成立しなくなります。要は、人としてごく普通のコミュニケーションが必要だということです。

NPOがシニア世代を上手に受け入れるには？

NPOにとって、社会経験やビジネス経験が豊富なシニア世代を受け入れることができれば、大きな戦力になるはずです。ただ、そうするにはNPO自身の資質も問われます。外からのアドバイスを拒む閉鎖性はないか。自分たちの活動に、好奇心旺盛なシニアを満足させるだけのテーマ性やストーリー性、発展性があるか。参加者が達成感を得られるようなゴールが設定されているか。シニアを巻き込むには、人や事業のプロデュース力が必要です。

富士山について一言

その他にも、あまりにも専門的になり過ぎていかチェックする必要があります。そうすると、途中からはなかなか参加しにくいものです。シニア世代を受け入れるためには、こうしたことに配慮すれば良いんじゃないでしょうか。

富士山が世界文化遺産に登録されることが決まった後のインタビューでした。富士山に70回も登り、1998年からは山頂にパイオトイレを設置する取り組みを進めてきた渡辺さんに、この点についても伺いました。「信仰の山としての富士山が世界に認められたことは非常に素晴らしいことですが、問題も山積しています。登山



三保海岸から望む富士山

者の激増による環境負荷の増加（し尿、ゴミ等）、登山者の安全確保、観光と開発抑制…、イコモスは16年までに解決すべき条件を指摘しています。世界の宝になったからこそ、要求される課題も大きいと言えるでしょう」

Opinion

こんな面白いこと若い人たちには譲れない！

63歳になったばかりで、私もバリバリのシニア世代です。グラウンドワーク三島を始めて21年目に入りますが、始めた時は皆30代後半〜40代。事務局長を務める私の周りにコアスタッフは13名。さらにその周りにスタッフ130名とインストラクター300名、そしてボランティアスタッフ500名がおり、この人たちも60〜70代が中心です。途中、難しい局面に何度か出くわしましたが、「右手にスコップ、左手に缶ビール」をスローガンに20年も活動してきました。皆の原動力となったのが達成感や充足感で、それがなければ続かなかったでしょう。

設立20周年の際、若い世代への引き継ぎについて大いに議論しました。たどついた結論が「こんな面白いことは若い人には譲れない！年を取ってお互い自由になる時間が増えたいし、

社会参加の素晴らしいさも実感している。自分の生き甲斐として「死ぬまでやり続ける」と決めました。もちろん、若い人を拒絶しているわけではありません。年間100〜150人の大学生に、職場体験やボランティア体験の場として開放していますし、それはこれからも続けていきます。



グラウンドワーク三島が実施してきたプロジェクトの象徴「再生した源兵衛川」



特定非営利活動法人グラウンドワーク三島
専務理事・事務局長
都留文科大学文学部教授 農学博士
渡辺豊博さん

わたなべとよひろ
1950年秋田県生まれ。元静岡県庁職員。三島ゆうすい会、財団法人日本グラウンドワーク協会、NPO法人富士山クラブ等の事務局長を歴任。著書に「NPO実践講座」（ぎょうせい・共著）、「富士山学への招待」（春風社）、「共助社会の戦士たち」（静新新書）等多数。

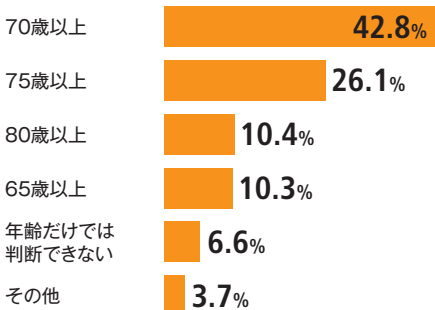
環境保全活動に取り組むシニア世代

データで見るシニア世代の意向

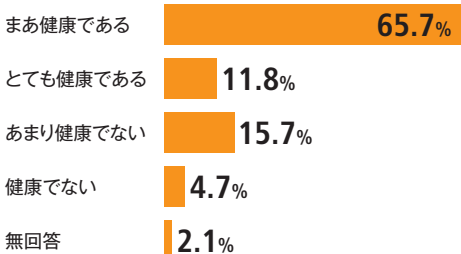
本号では、シニア世代をとり上げましたが、「年齢」や「社会参加」についてどのような意識を持っているのでしょうか。その傾向を示すものとして、内閣府が実施している「団塊世代の意識に関する調査」（平成24年）から、結果の一部を紹介します。

調査対象：昭和22年から昭和24年に生まれた男女
標本数：6,000人
有効回収数（率）：3,517人（58.6%）

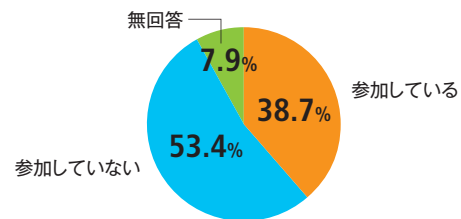
●何歳以上が高齢者か？



●健康状態



●社会活動への参加状況



●今後、参加したい社会活動（複数回答）

